

博士論文要約

日本近代文学に見る〈教員〉像と教育言説の研究

広島大学大学院文学研究科
出木 良輔

論文構成

序 章

第Ⅰ部 近代日本の教育雑誌と教育言説の欲望

第一章 教育雑誌『教育学術界』の文学と青年教員—中内蝶二「寒梅」をめぐって—

第二章 〈田舎教師〉の欲望をさえぎる—明治四〇年、教育界のなかの文学—

第三章 教育雑誌と〈女教員〉の大正—「理想の女教員」をめぐって—

第四章 教育雑誌と投稿青年の時代—井川天籟「海の花」と「教育」の位置—

第五章 女性文芸誌と〈女教員〉たちの欲望

—「ねえ、誰が貴女の労働を感心してくれるでせう」—

第Ⅱ部 日本近代文学に見る〈教員〉像と〈教員の物語〉

第六章 『坊っちゃん』は真に大教育書なり

—明治四〇年代、教員読者と「坊っちゃん」—

第七章 「田舎教師」の「理想」の行方—林清三を取り巻く言葉とまなざし—

第八章 「変人」あるいは〈田舎教師〉の「幸福」

—正宗白鳥「入江のほとり」と「独学」の時代—

第九章 失権する教員と「新教育」の転覆—谷崎潤一郎「小さな王国」と教員の変容—

第十章 「有島事件」と教員読者—「教材」としての〈有島武郎〉

終 章

附 録

一、 『教育学術界』文学作品及文芸関連記事目録

二、田山花袋「ひと時雨」本文及解題

三、田山花袋「教育圏外から観た現時の小学校」本文及解題

1. 研究の目的と背景

本研究は、近代日本の文学やメディアの分析を通じて、学校教員という記号の形成と流通のプロセスを問うものである。

「破戒」「坊っちゃん」「雲は天才である」（いずれも明治39年）「田舎教師」（明治42年）「小さな王国」（大正7年）「一房の葡萄」（大正9年）「二十四の瞳」（昭和27年）など、日本近代文学の〈名作〉として知られるこれらの作品に共通するのは、近代日本の学校教員を物語の中心人物として設定し、学校や教育のありようを映す〈教員の物語〉を描き出していることである。日本近代文学の歴史のなかで数多く生産されてきた〈教員の物語〉だが、そこに描かれる教員の姿は現実の学校教員たちの職業倫理や規範、自意識が形成されてゆく上で、あるいは彼らの社会的イメージが形成されてゆく上でいかなる役割を担ってきたのだろうか。

また、何も夏目漱石や田山花袋といった職業作家たちだけが〈教員の物語〉を描く小説を手がけてきたわけではない。教員を対象として発行されていた教育雑誌はその多くが小説や詩歌などの文学作品を掲載しており、中には読者からの投稿作品を積極的に掲載するものも存在した。

本研究では、これらの文学作品やメディアにあらわれた言説が近代日本の学校教員をどのように作りあげてきたのか、すなわち社会に流通する〈教員〉^{イメージ}像をどのように規定し、あるいは現実の教員たちの内面をいかに形成・操作してきたのかを問う。現実を単に反映するだけでなく現実を規定し作り出すものという言説観がM・フーコーに依るものであることは言うまでもないが、フーコーやJ・デュボア（文学制度論）に加えP・ブルデューの場の理論などを背景としながら社会の中で文学が果たす機能および文学の中に描かれる社会的事項について検討するアプローチは近年「文学社会学」とも呼ばれている。本研究は、この文学社会的観点から明治・大正期の様々なメディアや文学作品を横断し、そこに表象される教育や教員のありようを検討してゆくものであるとも言える。

教育や教員の歴史を問うこのような研究が、伝統的には教育史研究と呼ばれる領域に担われてきたものであることは改めて言うまでもない。教育史研究は殊に進展し、また細分化している。その中でも例えば石戸谷哲夫『日本教員史研究』（野間教育研究所、昭和33年12月）や陣内靖彦『日本の教員社会 歴史社会学の視野』（東洋館出版社、昭和63年11月）は旧制諸学校や教育行政に関する制度的史料から近代日本の教員の生態や彼らを取り巻く言説状況を明らかにするもので、本研究もこれらの成果に支えられるところが大きい。

また当然ながら、教員の研究は日本においてのみ進められてきたものではない。アメリ

カにおける教員研究の古典とも言えるW・ウォーラー『学校集団—その構造と指導の生態』（明治図書出版、昭和32年10月。和訳は石山脩平・橋爪貞雄、原著は昭和7年発表）は、メディアが映す〈教員〉像についても重く見ている。ウォーラーは、様々なメディアや言説に表象される「教師のカリカチュア」すなわち教員が教員として振る舞うことで形成される教員のイメージを「世人が戯画化した」〈教員〉像は、「一方で世論を反映するとともに、他方世論を決定してゆくもの」であると説く。先に触れたフーコーの言説概念とも通ずる主張だ。

さらにウォーラーは、世人が「いく分悪意をこめて」描き出す「漫画的な教師像」と、世人が「好意的に」描き出す「理想化された教師像」という対極的な二つの〈教員〉像の存在にも触れている。前者は「世間が教師の実態をどうみているかを示すもの」であり、後者は「ぎせいの精神に富み、穏かで、親切で、ひっこみ思案で、アクセク働き、給料は低くてもジッと辛抱して、学校のためなら「時間と金銭を惜まない」など、「世間が教師に「かくあるべし」と望む内容を示す」もので、「教師は、このような教師像がきめる枠から、はみ出した行いをしてはならぬことになっている」。つまりこのような形で社会的に構築された〈教員〉像が、現実の教員を規定し、時に規制・束縛しているというわけだ。雑誌メディアや文学作品といった言説装置がここに密接に関与していたことは疑い得ない。

一方、制度的史料を主要な分析対象とする日本の教員史研究において、小説のようなフィクションに描かれる〈教員〉像が分析の中心となることはほぼ皆無であり、従来の教員史研究は教員を取り巻く文化やメディアの諸問題を看過してきた感があった。もちろん、「小説のなかの教師」の描かれ方にこれまで一切関心が払われてこなかったというわけではない。教員を描く小説をピックアップし、それらを検討するものとしては西郷竹彦や伊ヶ崎暁生、佐野美津男らの一連の成果が存在する。さらに、綾目広治『教師像 文学に見る』（新読書社、平成27年11月）は森有礼や沢柳政太郎の教育言説や教員をめぐる思想や言説、時代状況を踏まえた上で明治から現代までの小説の表現を捉えるものだ。

教育制度や教員養成をめぐる同時代状況にも目を配りながら小説が描く教員像について考察を行うこれらの成果だが、そこにおいてもやはり小説がパフォーマティヴに構築する存在としての、あるいは近代文学読者としての教員の歴史性についてはほとんど問いに付されてこなかったと言って良い。しかしウォーラーの言うように、「教師のカリカチュア」が現実の教員とパフォーマティヴな関係を結ぶものだとするならば、メディアが提示する〈教員〉像について考察することは、教員を取り巻く文化・社会の問題を明らかにする上でも、個々のテキストの読解を更新する上でも意味を持つはずだ。本研究ではこうした問題について検討し、近代学校教員と文学の関係性に新たな視角をもたらすことを目指した。

2. 論文の構成と概要

本論文は第Ⅰ部「近代日本の教育雑誌と教育言説の欲望」ならびに第Ⅱ部「日本近代文学に見る〈教員〉像と〈教員の物語〉」の2部から構成される。概して言えば、第Ⅰ部では教育雑誌というメディアについて、第Ⅱ部では日本近代文学における教員表象についての議論を展開している。

以下、具体的に概要を示してゆく。第Ⅰ部では主に同文館発行の教育雑誌『教育学术界』に焦点を当て、そこに掲載された教育言説や文学作品が内包するイデオロギー性を検討している。

『教育学术界』掲載の文学作品を扱う先行研究は存在しない。そのため、第一章「教育雑誌『教育学术界』の文学と青年教員」ではまず、『教育学术界』に掲載された文芸作品や文芸関連記事を収集し、整理と分析を行なった。また、同誌が誌面の改良を行ない、文学的傾向を打ち出してゆく明治35年前後に焦点を当て、同誌の内外における「教育的文学」ないし「教育小説」をめぐる議論を概観した。その上で、『教育学术界』（明治35年1月）に「新年付録」として掲載された「教育小説」である中内蝶二「寒梅」を取り上げ、『教育学术界』において文学テキストがどのような機能を担っていたのかを考えた。「寒梅」もやはり、〈理想の教員像〉を描く小説である。ここでは『教育学术界』に掲載されていた教師論が描く〈理想の教員像〉とリンクする教員像を「寒梅」が表象していたことを明らかにした。要するに『教育学术界』は、物語化した教育言説として、文学テキストを利用していたといえるだろう。

第二章「〈田舎教師〉の欲望をさえぎる」では、明治40年代の『教育学术界』に掲載された「教育小説」群を取り上げ、同じ頃ベストセラーとなり、きわめて多くの教員読者を獲得した「教育小説」である小泉又一『教育小説棄石』（同文館、明治40年5月）の表現と対比しつつ分析した。『教育小説棄石』が描く〈理想の教員像〉とは、一言で言えば、「地方の小学校教員の職に一生を捧げ、階層上昇を望まない存在」である。『教育学术界』は『教育小説棄石』の書評を掲載していた他、この小説が描く〈理想の教員像〉を反復して表象するような「教育小説」を明治40年代に複数掲載していた。のみならず、この時期の『教育学术界』掲載小説からは、地方から上京した画家や小説家が東京で夢に破れ挫折・破滅してゆくというプロットを持つ物語を見出すことも出来る。これらの小説が、文学に燃える当時の青年教員たちの欲望を「さえぎる」機能を担っていた可能性をここで指摘した。

続いて分析の射程に入れたのは、教員社会のジェンダー編成をめぐる問題系である。第三章「教育雑誌と〈女教員〉の大正」では、大正期の「教育小説」に描かれる〈理想の教

員像〉のジェンダー間での振幅を問題化した。大正初年は、女子教育の成熟と女性教員の増加を背景として「女教員問題」がメディアを賑わし、多くの教育家によって「理想の女教員」像が模索されていた時期でもあった。この時期の「教育小説」にも女性教員がしばしば表象されることとなるが、「教育小説」において女性教員は、それまで以上に露骨に地方での教職を肯定的に語る存在として描き出されていたと言える。

一方でこの時期には、教職を否定し、辞職して上京してゆく男性教員の姿が描かれるなど、表象される教員のジェンダー間での差異が見え始める。この章では、過剰なまでに地方を美化する女性教員の語りを、女性教員を地方へと囲い込む表現として捉え、女性教員の増加に伴う下位化・抑圧の運動に「教育小説」が一役買っていたものとして位置づけた。こうした分析によって浮かび上がったのは、「教育小説」が、教員社会のジェンダー秩序の維持や強化にも深く関与していた可能性であったと言えよう。

続く第四章と第五章は共に、第Ⅰ部における補論のような意味を持っている。**第四章「投稿青年と教育雑誌の時代」**では、『教育学术界』や『小学校』（共に同文館）の常連投稿者であった井川（恒藤）恭をピックアップし、彼が井川天籟の名で発表した小説「海の花」を取り上げた。後に法哲学者として名を成す井川（恒藤）恭だが、彼は明治後半から大正期にかけて創作活動を行い、様々なメディアに作品投稿を行っていたことでも知られている。彼の処女小説とされる「海の花」は『都新聞』の懸賞小説で一等を獲得した作品であり、明治41年7月に同紙で集中連載された。井川の故郷でもある島根県を主な舞台とする物語を描いているが、言ってしまうと明治後期に流行した通俗的な新聞小説のパターンをわかりやすく反復するテキストで、評価もそれほど高くない。

ただし注目されるのは、この作品においても、視点人物として教員が描き出されること。そして、彼によって「教育の害毒」なるものをめぐる語りになされることである。教員による「教育」批判、というアイロニカルな表現を見せる「海の花」だが、処女作である「海の花」において、既にこのような「教育」批判を展開していた井川が、後に教育雑誌に教員の物語を投稿していたことは興味深いと言える。実際、『教育学术界』などに掲載された井川の小説からは、「教育小説」のパターンから逸脱するような表現も見られる。このような事実からは、〈理想〉の教育像や教員像が、『教育学术界』の投稿者に必ずしも共有されていなかった可能性も浮かび上がった。井川恭は、言ってみれば『教育学术界』というメディアのイデオロギーに亀裂を入れうる異端分子と形容することが出来るだろう。

第五章「女性文芸誌と〈女教員〉たちの欲望」では、女性文芸誌『女子文壇』『青鞥』に掲載された小説における教員表象や教職をめぐる語りについて検討した。これらの雑誌の読者・書き手には〈女教員〉やその経験者が一定数存在していた。『女子文壇』がしばしば〈女教員〉からの投書や投稿小説を掲載していたことや『青鞥』参加者に生田花世、尾島

菊子など〈女教員〉経験者が多数存在していたことはよく知られている。この章では、彼女たちの小説や教員体験記を教育言説と比較照合することで、教育雑誌における様々な表現を相対化すると共に、『教育学術界』の文学が内包するイデオロギーを浮き彫りにすることを試みた。とりわけ生田花世のテキストからは、第三章で見たような大正期の教育言説を意識し、それを茶化すような表現も見出すことが出来た。このように教育雑誌というメディアの外部の視点を導入し、様々な書き手による多様な表現性を捉えてゆくことで、教育言説や「教育小説」の表現の画一性やその背後にあるイデオロギー性が浮き彫りになったと言えるだろう。

第Ⅱ部では、「坊つちやん」や「田舎教師」といった著名な〈教員の物語〉を分析対象として取り上げ、そこに表象される〈教員〉像の分析を行うことで、作品読解の更新や思想的な位置の問い直しを図った。加えて、日本近代文学の作品や作家像を、教員という読者がどのように受容していたのか調査・検討した。

第六章『「坊つちやん」は真に大教育書なり』では、夏目漱石「坊つちやん」が明治40年代の教員たちにどのように読まれたのかを考えた。〈教員の物語〉を描く日本近代文学の代表とも言える「坊つちやん」が、当の学校教員たちにどのように読まれ得たのかについてはこれまで殆ど考察されてこなかった。この章では教育雑誌に掲載された記事から「坊つちやん」に関する教員たちの発言を拾い上げ概観することで、教員たちによって「坊つちやん」が「大教育書」として評価されてゆく様相を捉えた。

また、そのような評価の根拠を探るためにも、同時代の教育言説を視座としたテキスト分析も併せて行なった。それにより、「坊つちやん」というテキストから、いわゆる「聖職教師論」や、明治後期の教員の待遇問題に対する批評性が見出されることを明らかにし、また、そのような表現性が、実際に待遇改善を求める動きをみせていた同時代の教員たちと共鳴した可能性を指摘した。

ところで、「坊つちやん」が描き出すのは、四国という地方の学校で奉職する、いわば〈田舎教師〉たちの姿であったと言える。明治末期から大正期には、学歴の世界から脱落した哀れな存在としての〈田舎教師〉表象が様々なテキストにあらわれることとなるが、**第七章「「田舎教師」の「理想」の行方」**では、〈田舎教師〉を表象するテキストの代表例とも言える田山花袋「田舎教師」を取り上げ、林清三という〈教員〉像について考察した。

「田舎教師」には、第Ⅰ部で見た教育言説が描き出すような〈理想の教員像〉と、社会的上昇への欲望との間で揺れ動く、林清三という教員の姿が描かれている。特に注目したのは、このテキストにおいて教職を侮蔑するような清三の内面が語られていること、そしてそれが読者にのみ提示される点である。このテキストは、このような清三の本心をあずかり知らない他者が、清三の死後「石碑」を建立し、一方的に〈理想の教員像〉の如く彼

を頌徳してゆく様を描いている。つまり、教職を蔑視していたはずの清三が、他者から一方的に〈理想の教員像〉として見られてゆく様を描くわけである。こうしたことを踏まえれば、「田舎教師」は、〈理想の教員像〉を語る言説の虚構性・理想性を脱色してしまうテキストであったとも言えるだろう。

第八章「「変人」あるいは〈田舎教師〉の「幸福」でも、同じく〈田舎教師〉の物語である正宗白鳥「入江のほとり」を取り上げ、そこに描かれた「独学」行為の問題性について検討した。このテキストが描き出すのは、教職のかたわら、自宅で英語の「独学」に没頭する小学校教員・辰男と、彼を「変人」扱いする家族の物語である。

辰男の「独学」行為を評価し直すためにここで補助線としたのが、イヴァン・イリッチの『脱学校の社会』である。イリッチは、教育や学びといった営みが学校制度によって独占されること（学校による教育の囲い込み）を問題視し、学校制度を含めた、社会全体の「脱学校化」を説いている。辰男の「独学」行為がこの「脱学校化」の実践などと断言するわけではないが、本来ならば学校や教育の価値を伝搬すべき存在である教員が、「独学」という、学校制度への抵抗とも取れる行為に没頭していることは重要だろう。こうした点を踏まえ、この章では、学校制度に抗う〈田舎教師〉という辰男の「変人」性が、当時成熟しつつあった学歴社会のありように対し批評性を内包したものであったと指摘した。

第九章「失権する教員と「新教育」の転覆では、谷崎潤一郎「小さな王国」の教員表象と、彼の教育実践のありようについて検討を加えた。「小さな王国」は、従来、作品発表前年に生じたロシア革命や、当時の共産主義の動向と関連付けて読まれることの多かったテキストである。しかしここでは、作中に登場する教員・貝島の教育実践のありようと、同時代の教育パラダイムの関係性に着目し、読み直しをはかった。

例えば、子どもたちにとっての「怖い先生」ではなく「面白いお友達」になろうと試みる貝島の姿は、「児童中心主義」をうたう大正期の新しい教育思想に合致するものとして評価できる。しかしながらそのように新時代の教育パラダイムを受け入れた結果、貝島は教室における権威を失い、凋落してゆく。このようにアイロニカルな構造を持つ「小さな王国」を、ここでは、同時代の自由主義的な教育パラダイムに対する批評的なテキストとして位置づけた。

先の第六章では、教育言説が提示する文学作品の解釈の特異性に触れたが、**第十章「「有島事件」と教員読者**」では、教育雑誌や教育言説が、近代文学の「作家像」をどのように描き出していたのか、という問題について考えた。

ケーススタディとして目を向けたのは、大正期の国語教科書に多くの作品が掲載されていた有島武郎である。教材化された有島テキストは、語り手である「私」と、作者・有島を直結する、大正期の人格主義的な読みのパラダイムの中で享受されていたことが、当時

の教育者の発言などから明らかになった。それによって生み出されていたのは、簡単にいえば「苦心」し弱者によりそう聖人君子の如き有島武郎イメージだったと言える。

しかしながらこのように美化された有島イメージは、大正12年の情死事件、いわゆる「有島事件」によって大きく揺らぎ、反転することとなる。この事件によって、教科書に掲載されていた有島作品も悉く削除されてゆくのだが、ここで注目したのは、現場の国語教員たちがこの事件をどのように見ていたのかということである。実際に当時の教育雑誌を見ると、有島をいわば「生きた教材」として批判的に乗り越えようとする教員たちの発言と記述を確認することができた。

従来、「有島事件」は、同じ年の9月におきた関東大震災によって忘れられ、一時的かつスキャンダラスな消費に終わった事件として説明されてきた。しかしこの章での作業によって、有島テキストや「有島事件」の一時的な消費者にはなり切れない教員読者のありようが浮き彫りになったと言える。

3. 総括と今後の展望

以上のような分析から、近代日本の学校教員を取り巻くイメージを維持・強化し、時に攪乱するようなメディアと文学の機能が浮き彫りになった。終章でも指摘したように、こうした成果は教育の「ブラック化」が問題視されつつある現代の教育問題とも接続が可能だろう。このような意味においても、本研究は一定の社会的インパクトを有するものであると言える。

研究の結果、新たに生じた課題や疑問についても触れておく。

第一に、教育雑誌の投稿者はジェンダーや職業、居住地域といった細かい素性はおろか、本名すら不明、というケースが少なくなかった。今後は彼らの素性をより細かく調べ、ジェンダーや社会的な階層性、あるいは地域性なども視野に入れた分析を展開してゆく必要があるだろう。

第二に、本研究で取り上げられなかったテキスト群に今後どのようにアプローチしてゆくのか、ということも考えてゆく必要がある。例えば、男性作家による女性教員表象への目配りが弱かったことも反省点の一つである。博士論文の第Ⅱ部では、漱石や花袋、谷崎らのテキストが教育や社会に対して持ち得た批評性を抽出し、評価してきたが、日本近代文学が旧来のジェンダーロールや社会的規範の再生産に加担していた側面もまた否定できない。そうした側面にも目を向けることで、教育と文学、メディアの歴史をより多面的に、奥行きある形で記述してゆくことが可能となるものと思われる。

そして第三の課題として挙げられるのが、外地で翻訳（翻案）された「教育小説」類に

関する検討の必要性である。具体例として挙げられるのが包天笑「埋石棄石記」（1911年）等だが、これはタイトルからも明らかなように、第二章で取り上げた小泉又一『教育棄石』を中国語に翻訳したものである。外地の教員養成において日本から輸入された「教育小説」がどのように機能していたのか、現段階では明らかになっておらず先行研究もほとんど存在しない。しかし、これらの翻訳（翻案）版「教育小説」を分析の射程に入れてゆくことで、「日本」教員史研究や「日本」近代文学研究といった括りそのものを再考してゆく必要も生じてゆくかもしれない。

日本近代文学の歴史の中で数多く生み出されてきた〈教員の物語〉は、今なお多様なメディアを通して生産・消費され続け、教育や教員に対する社会的通念の形成に影響を与え続けていると言える。言い換えればこのことは、学校という場や教員という存在、そして教育という営みと、それらをめぐる物語がわたしたちにとっていかに興味や好奇心、共感性をそそるものであるかを如実に示しているわけだが、現在わたしたちが容易には目にすることのできない、忘れ去られた〈教員の物語〉群の存在にも目を向ける必要がある。「教育小説」などがその一例だ。

日本近代文学の〈教員の物語〉と、教育言説や「教育小説」が時に反発し合いながら絡み合ってきた歴史を捉えてゆくことで、わたしたちが自明とし、場合によっては疑うことすら困難となりつつある近代のシステムとその構造をも浮き彫りにすることが可能となるはずだ。そうした期待を抱きながら、今後も生産され続けてゆくであろう〈教員の物語〉の動向を見守ると共に、歴史の中に埋もれたテキスト群を掘り起こし、光を当て続けなければならない。